



「60年の歴史の幕を閉じます」

県立淡路視覚特別支援学校長 不動 亨

校庭の白木蓮の蕾が膨らみ始め、春の息吹きが感じられる頃となりました。淡路盲学校から淡路視覚特別支援学校と校名が変更になってから2年目を迎えましたが、昭和23年の淡路盲学校創立以来60年の歴史の幕を閉じることになります。その間、今日まで県南部の視覚障害教育の中核的な役割を果たしてきました。卒業生は、三百有余名を数え、多くの方々は鍼・灸・マッサージ師として、地域社会で貢献されています。



しかし、現在、理療科の成人の生徒が1名のみで、本年3月末をもって閉校になります。60年の歴史を振り返る時、寂しさを禁じ得ません。

本校は、従来から理療ボランティア活動を積極的に実施してきました。本年度も、地元の川西地区老人会、盲老人ホーム「五色園」・聴覚障害者老人ホーム「ふくろうの郷」の方々に、理療奉仕活動を実施し、教員・生徒共に、最後の最後まで、地域貢献の姿勢を貫くことが出来ました。



閉校を記念して、校舎内に、「メモリアルルーム」と「記念碑」を設置しました。いつまでも卒業生の心のふるさとであり続けて欲しいと願ってやみません。

今日までご指導いただいた旧教職員の方々をはじめ、お世話になった地域の皆様・同窓会の方々に深く感謝申し上げます、あいさつといたします。



卒業式

2月27日に第34回高等部卒業証書授与式が挙行され、本校最後の卒業生となる島脇さんに卒業証書が不動校長から授与されました。また、たくさんのご来賓のご出席をえて心あたたまる祝辞をいただき、最後の卒業式に花を添えていただきました。



続いて、本校と関わり合いの深い淡路聴覚特別支援学校の葉満くんからお別れの言葉と演奏が送辞として行われ、それを受けて、島脇さんが3年間の思いがこもった答辞を読み上げ、会場が涙につつまれました。

国家試験も無事に終え、3年間皆勤という素晴らしい学校生活を送った島脇さんですから、きっと理療家として立派に活躍してくれると信じています。



卒業生のメッセージ

六十歳近くになって学生生活を送るとは夢にも思っていませんでした。もっとしっかり勉強しておくべきだったと後悔しているところですが、人生一生勉強です。これから理療家として全力を出して、年齢に負けず頑張っていきます。



先生方から

卒業生へ贈る言葉

「贈ることば」

校長 不動 亨

島脇さん、ひとりぼっちで寂しかったでしょう。本校最後の卒業生になりましたが、3年間皆勤で、地道によく努力されました。理療の技術を生かして地域で貢献してください。期待しています。

「祝卒業」 担任 美澤 省二

島脇君卒業おめでとうございます。3年間遅刻・欠席もなく本当によく頑張りました。本当の治療師とは患者の悩みを聞き信頼関係を構築できる人だと思います。これが出来れば治療の半分は成功であるといわれております。これまで勉強してきたことを基礎にしてあらゆる面で患者に信頼してもらえる治療師を目指して頑張ってください。誰にも真似の出来ない技術さえあれば、どんなに不況が続いても全く関係はありません。理療科の勉強に終わりはありません。お互いに頑張りましょう。



2・3学期の主な行事

「YU・らいふ・サポート事業」・理療活動Ⅲ

日時 平成20年9月30日 10時30分～12時35分
場所 本校 第1臨床室

〔理療活動Ⅲを終えて〕

高等部長 金田俊典

理療活動は地域の人々との“ふれあい”を主な目的として「YU・らいふ・サポート事業」の一環として実施されています。実施内容は生徒が身に着けたあん摩・マッサージ・指圧、鍼、灸の技術を地域の人々に披露するものであります。いろいろな不定愁訴（肩こり・高血圧・不眠・冷えなど）を訴えられている人々の健康面でのケアやサポートに寄与できれば幸いです。

生徒数が減少する中で今年度は4回の理療活動を実施しております。今回は第3回目にあたりますが、最初で最後の試みとして聴覚障害者老人ホーム「ふくろうの郷」の方々に対して実施することになりました。一人当たりの施術時間は20分ぐらいといつもよりは少なかったのが少し残念です。

生徒は1名なので理療科教員5名も施術にあたりました。ふくろうの郷の方々11名を施術しました。こちらは視覚障害者であるので、コミュニケーションがとれるか心配をしましたが通訳の方も参加していただいたのでなんとか施術ができました。力具合や凝っている部位に特に注意を払いおこないました。それでも、痛みを感じた方もいらっしゃったようです。施術を受けた感想は「もっと長くしてほしかった」、「腕が楽に上がるようになった。」、「歩きやすくなった」、「肩が楽になった。」など喜んでもらった方も多かったようです。ふくろうの郷のみなさまに対して、治療奉仕ができ

たことを喜ばしく思っています。

最後になりましたが、ふくろうの郷の皆様に対して、生徒の練習台になっていただいたことを改めて感謝申し上げますとともに、ふくろうの郷のみなさまのご健康を願っております。



「YU・らいふ・サポート事業」・健康セミナー

日時 平成 20 年 9 月 30 日 13 時 30 分 ～ 15 時 00 分

場所 本校 会議室

テーマ「気功を用いたリラクゼーション」

講師：本校教員 美澤 省二

9月30日(火)に川西地区みどり会の21名の皆様に参加をいただき、本校会議室において「健康セミナー」を開催いたしました。本年度は、中国の天津中医薬大学留学時より気功療法を30年間にわたり研究している美澤講師の指導のもと、本校生徒も一緒に、「気功とは何か」、「気功の三原則」や「気功の効果」についての説明を受けた後、「6種類の呼吸法」と「体にある12の小周点を利用してのリラクゼーションや健康法」についての実技に取り組みました。

初めて体験する人がほとんどで、参加者の皆さんは興味をもって真剣に取り組んでいらっしゃいました。事業後のアンケートでは、「今日から呼吸法を練習します。」、「日常生活に是非気功を用いたい。」や「このような機会をまたもっていただきたい。」など、うれしいお答えをいただきました。



「YU・らいふ・サポート事業」・理療活動Ⅳ

日時 平成 20 年 12 月 2 日 8 時 50 分 ～ 15 時 10 分

場所 養護盲老人ホーム「五色園」

〔理療活動Ⅳを終えて〕

教諭 菊井 澄人

12月2日(火)に、洲本市五色町にある養護盲老人ホーム「五色園」にて本年度4回目の『理療活動』を行いました。

入所者(50名)は全員視覚に障害があり、外部との交流も少なく、この活動を楽しみにしていただけていました。またあん摩・鍼灸の免許取得者が多く、施術を通して入所者との交流を深め、アドバイスもいただき、本校生徒にとっても有意義な活動となりました。

施術を受けた方からは「揉んでほしいところを丁寧に揉んでもらえて良かった」、「すごく楽になりました」という感想が聞かれました。他には「来年も来て欲しい」と声もありました。園長さんからも「縁があって続いているのでこれからも機会があれば声をかけてほしい」と嬉しい言葉も頂きました。

理療技術や幅広い知識・教養を身につけるよい機会になったと思います。

五色園の入所者、職員の皆様から感謝いたします。



「課題研究発表会」

日時 平成20年12月17日 9時40分～10時30分

場所 本校 専3教室

「特効穴について」 高等部専攻科理療科3年 島脇 寛正

島脇さんの研究テーマは「特効穴について」でした。授業の合間も費やして行った研究を、大変落ち着いた態度で発表し、質疑応答もはきはきと答えていました。

将来の就業にとって有意義な研究を、実践し役立ててください。



「創立 60 周年記念式典」を終えて



本校と、これまで共に歩んできた淡路聴覚特別支援学校の創立 60 周年記念式典が、平成 20 年 11 月 1 日(土)に挙行されました。

兵庫県教育委員会からは伊藤教育次長、淡路島内からは柳洲本市長、富岡淡路市副市長と 3 市教育長、近畿及び県内の特別支援学校長、さらにお世話になっている地域や関係機関の皆様など、200 名を超えるご出席をいただきました。

同窓会からもたくさんの皆様のご出席があり、記

念事業実行委員を代表して畑田同窓会長からご挨拶がありました。学校への感謝の言葉と閉校となる母校への惜別の思いが述べられ、会場から拍手が巻き起こりました。また、在校生のあいさつでは、島脇さんが卒業後に向けた豊富を力強く述べるなど、記念式典は盛会のうちに終わることができました。



また、式典後に記念行事が行われ、本校は、昭和 61 年度に小学部を卒業され、チェンバロ・ピアノ奏者として活動されている鈴木あゆ子さんをお迎えしての「ピアノコンサート」を開催いたしました。バッハやショパンなどの曲を演奏していただき、閉校を迎える在校生と職員が同窓生とともに、その素晴らしい音色を聴くことができたことを改めて感謝いたします。



さらに、記念事業の後には、本年度をもって閉校となることから同窓会の呼びかけで同窓生と旧職員が集い昼食会を開きました。一人ひとりになつかしい昔話を披露するなど、和やかな雰囲気の中で楽しい時間を共有することができ、本校にとって最後の創立記念事業が無事に終了しました。



閉校セレモニーを開催

卒業式終了後、来賓としてご参加いただいた皆様のご出席を得て、閉校セレモニーを挙行いたしました。

不動校長と畑田同窓会長のあいさつの後、グラ



ウンドにおいて記念碑の除幕式を行いました。校舎は淡路聴覚特別支援学校の所有となりますが、淡路盲学校と淡路視覚特別支援学校が、この地で60年の教育活動を行ってきた証しを残すことができました。

また、普通棟3階にはメモリアルルームを設け、60年間の活動の記録や思い出が詰まった品物を残すことにいたしました。



ひょうご県民ボランティア活動賞を受賞



11月30日(日)に三木市立教育センターで行われた表彰式で「ひょうご県民ボランティア活動賞」を受賞しました。

昭和38年から「治療奉仕活動」として年間行事に位置づけ、学校周辺の地域の皆様、島内の老人ホームなどを対象に45年間で延べ2,000人以上の方々に奉仕活動を行ってきたことが認められ受賞することができました。

あらためて本事業にご参加いただいた皆さま方に、感謝を申し上げます。



閉校に思う

閉校に思う

三谷 暁男

本校にかかわってこられた皆様は、60年という歴史の中で想像を絶する苦労をされてきたことと思います。校舎も教具も十分でない時代から今日まで教壇に立たれた先生方、それに応えようと精一杯努力してきた子どもたち、それを懸命に支えた保護者、さらに暖かい目で見守ってくださった地域や関係機関の皆様、お疲れさまでした。そして、本当にありがとうございました。

閉校に寄せる思い

金田 俊典

本校に着任以来9年。生徒・先生方との出会いと別れの中で印象的だったのは少人数ながら理療関係の学会に数多く生徒が参加していることに驚かされました。年々生徒数が減っていき、一抹の寂しさを感じざるを得ませんでした。

『教師自身が学びの心を持つ、生徒と共に学ぶ』をモットーに邁進してきましたが、1年目は特に勉強に明け暮れる厳しい年でした。しかし、生徒にはわかりにくかった授業もあったと思います。このような経験が生徒が教師を育てるといふことなのでしょう。

本校は、60年の歴史に幕を閉じようとしています。哀感を覚えてなりません。創立に際して数多くの先生方の盲教育に対する熱い思いを感じます。また、故芹澤勝助先生（元筑波大学名誉教授）のご尽力も大きかったことを聞いております。本校のすばらしき伝統を築かれた諸先輩方に感謝の意を表すると共に卒業生のご活躍とご多幸を願っています。



閉校にあたって

菊井 澄人

私は、学生として6年間、教職員として16年間お世話になりました。色々な人に助けられながら、この学校の”あゆみ”を見てきました。

視覚障害教育から特別支援教育に変わり、60年続いてきた淡路盲学校が閉校となることは寂しく思うとともに、今後の淡路島内の視覚障害児（者）に対する教育・就労支援に不安を感じています。

今後の淡路島内の教育・支援の発展を期待しています。

60年間お疲れ様でした。ありがとうございました。



閉校に寄せて

美澤 省二

春はグミ、夏は竹の子にゆすら梅に枇杷、秋は柿に石榴、冬は金柑、四季夫々に豊富な果実が実る淡路視覚特別支援学校。1年間でしたが楽しい思い出がいっぱいの学び舎でした。特に春は校舎のいたる所で桜が満開になり、いかにも学校という雰囲気をかもし出していました。



この校舎の思い出は私の脳裏に一生焼きついて離れることはないでしょう。

淡路視覚特別支援学校 閉校に際し 白水 啓文

淡路盲学校から淡路視覚特別支援学校に校名が変わり平成 20 年 11 月には 60 周年記念行事を行い平成 21 年 3 月に閉校となる。卒業生としては寂しく、感慨深いものが有りますが、最後を見届け、よき思い出を胸に前を向いて歩いてゆきたいと思います。多くの思い出を有難う御座いました。



閉校に伴い思う事は

大野晋雄

余剰公務員が削減され非効率的給与状況が是正される中、障害者生徒数が大都市より少ないにも拘らず、全都道府県でも盲学校等の教育機関が多い兵庫県で統廃合が進むのは、国民の声が反映された結果であると考え、また評価すべき事柄であると思う。時代は常に動いており、教育の形も常に変わってゆくもので、組織はそれに対応する義務を持つからである。

ただ、「そこに巻き込まれる生徒はどうか」と考えた時に心苦しくなるのは、当方が教育者であるからか、若輩の浅慮であるのかは不明である。馴染み深き出身校が消え行く物悲しさは、小中高全ての出身校を失くした当方にも理解出来るものであり、生徒にも申し訳なく思う。

しかし、本校……特に「理療科」は障害者更生の場であり、同時に結果を得る事を義務とする医療教育である。思い出を得る為に通う場所ではない。「卒業して患者をどれだけ治療するか」多大な税金が投与されている以上、それが国民に対する返答でなければならない。如何なる者も、権利とは義務に伴うものである事を銘記せねばならない。そういった意味で、学習意欲旺盛な生徒が数多く在籍してきた事は、幕の下りる本校にとっても職員にとっても本懐であった。そしてそれは社会福祉の一つである障害者救済システムにとっても、僥倖であったと言える。



今後、一時的に視覚障害者数は減少するが、当方は視覚障害者教育の根幹は変わらぬと思っている。教育とは、歩むべき道を生徒自らに見出させる事で

ある……乱るる教育界において、我ら教育者もまた帯の締め処であろう。使命を果たした校旗を眺めながら、当方もまた来年度の他県赴任へ向けて更なる精進を自らに誓うのであった。

閉校に思う

西村 節子



4月から実習助手としてお世話になっています。寄宿舍指導員とは全く畑違いの理療科の仕事に携わってきました。短い期間でしたが、あんま・はり・きゅうのすばらしさを身近に感じる事が出来ました。創立60周年で閉校になることがほんとうに残念ですが、思い出をいつまでも心の中に大切にしていきたいと思います。

閉校に思う

山西 雅子

平成21年3月をもって60年の歴史に幕を下ろそうとしています。この60年間たくさんの方々にご協力いただいたことと思います。私は、職員として2年間お世話になりました。その間にたくさんの思い出ができ、閉校になることをとても寂しく思います。

今までありがとうございました。



《AEDの設置について》

本校では、淡路聴覚特別支援学校とあわせて4台のAEDを設置しております。緊急の際は、心臓マッサージや人工呼吸などの応急処置、119番通報に加え、本校のAEDもご活用ください。

《学校評価について》

平成20年度の学校評価につきましては、本校ホームページ (<http://www.hyogo-c.ed.jp/~awaji-svn>) 上で公表しておりますのでご覧ください。

編集後記

「わかくさ」を発行するのも、とうとう最後になってしまいました。児童・生徒数の減少等のために60年の歴史に幕を閉じ、閉校という結果になったことを誠に残念に思います。

最後になりますが、これまで支えてくださった地域の皆様、関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

